

幸福度および所得分布に基づく世界の主要国の経済実態の検証

著者	鈴木 孝弘, 田辺 和俊
雑誌名	現代社会研究
号	12
ページ	23-31
発行年	2014
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00007067/

幸福度および所得分布に基づく 世界の主要国の経済実態の検証

鈴木 孝 弘

田 辺 和 俊

これまで各国が経済発展の目安に用いてきた国内総生産（GDP）や経済成長率に代表される経済指標でなく、心の豊かさを示す幸福度を重視しようという考え方が注目されている。しかし、幸福度が経済指標とどのような関係があるかについてはこれまで十分な解析は行われていない。本稿では、世界中の150カ国について、World Database of Happinessの主観的幸福度データを用い、所得分布や各種経済指標に基づいて、幸福度と経済実態との関係を分析した。その結果、国民の幸福度には、所得分布や経済指標により表される経済実態だけでなく、国民性が関与していることが判明した。各国の国民性の違いを見るには幸福度とジニ係数との相関図が有効であり、各国がその図において世界地域ごとにクラスターを形成し、その相対的位置に国民性が反映されることを見出した。特に、中南米諸国の幸福度が世界全体についてのジニ係数からの予想より高い傾向にあり、これはラテンアメリカ民族の国民性によるものと推測した。

keywords：主観的幸福度 所得分布 ジニ係数 経済実態 World Database of Happiness

目 次

- 1 はじめに
- 2 幸福度と所得格差の相関
- 3 主要国の経済実態の分析
 - (1) 中南米地域
 - (2) 欧州・北米地域
 - (3) アジア・オセアニア地域
 - (4) アフリカ地域
- 4 結 論

1 はじめに

近年、世界の国内あるいは国家間の所得格差が幅広い関心を集めている（Diamond 1997, Sachs 2005, Allen 2011, Acemoglu and Robinson 2012）。その背景には市場原理主導のグローバル経済の進行による所得格差の拡大がある。2014年1月、世界経済フォーラムは、2014年に世界が直面する最大のリスクは所得格差問題の悪化であると指摘する報告書を発表し、所得格差リスクは各種のグローバルリスクの中で今後10年間に起こる可能性が最大であり、重大な損害をもたらす原因になると警告した（World Economic Forum 2014）。

2011年9月に米国ニューヨークで発生した所

得格差の解消を求めるウォール街占拠運動のスローガン“We are the 99%”は米国の上位1%の富裕層の所有資産の増加を表している。米国のみならず、世界各国で所得格差が拡大しており（鈴木・田辺 2013）、中でも中国は市場経済の導入により所得格差が深刻化している。ごく最近の調査（北京大学 2014）では全体の1%の富裕層が資産の3分の1以上を保有し、25%の極貧層は1%しか保有していない。その結果、1980年代にはジニ係数が0.2前後であったが、2012年には0.73という驚異的に高い数値となった。

地球規模でも現在、2%の富裕層が世界の富の半分を占有している一方、50%の貧困層は1日2.5ドル以下で生活している（Crow and Lodha 2011）。最富裕国と最貧国の所得格差は1820年には3:1であったのが、1960年には70:1に、2012年は260:1に拡大している。そのため、世界全体の所得格差のジニ係数は0.7に達し、この数値は1990年以降、低下していない（Lakner and Milanovic 2013）。

一方、これまで各国が経済発展の目安に用いてきた国内総生産（GDP）や経済成長率等の経済指標では国民の幸せや国の豊かさを測れないので

はないかとの認識がある (Frey and Stutzer 2002)。そこで、GDP 等の経済指標でなく、心の豊かさを示す幸福度を重視しようという考え方が注目されている (Stiglitz et al. 2010, Bok 2011, Graham 2011, 幸福度に関する研究会 2011)。幸福度という概念を世界で初めて提唱し、国家の方針として推進しているのはブータンの国民総幸福 (Gross National Happiness, GNH) である。GNH は 1972 年、第 4 代のワンチュク国王が提唱した国民全体の幸福度を示す尺度であり、心理的幸福、健康、教育、文化等の精神面での豊かさを指標としている (枝廣他 2011)。

しかし、国民の幸福度と GDP 等の経済指標との関係については、単純な相関解析は数多いが、所得分布や各種の社会経済指標に基づいた分析は行われていない (田辺・鈴木 2014)。そこで本稿では、世界中の数多くの国について、所得分布、GDP、ジニ係数等の社会経済指標に基づいて、幸福度と経済実態との関係を詳細に分析した。

2 幸福度と所得格差の相関

世界各国の幸福度のデータは幾つかの DB から入手できるが、それらは国民の個人的幸福観を調査集計した主観的幸福度 DB と、経済指標や健康指標等の数値データから算出した客観的幸福度 DB に大別できる。例えば、人間開発指数 (Human Development Index, HDI) は国民 1 人当たりの GDP (GDP per capita, GpC)、平均寿命、識字率・就学率の数値データから算出されているため、国民の主観的幸福観は考慮されていない (UNDP)。

本稿では国民の主観的幸福度を示す指標として

World Database of Happiness (WDH) を採用した。表 1 に示すように、この WDH には世界 150 カ国の幸福度が 10 (非常に幸福) と 0 (非常に不幸) の間の数値で表されており、日本の幸福度数値は 6.5 で、上から 50 位である。先進国はすべて幸福度が 5 以上であり、幸福度が不幸の国は皆無であるが、途上国では 4.9 以下の不幸の国が 1 / 3 以上あり、幸福度の平均値は先進国と途上国でかなりの差がある。しかし、途上国の中には世界 150 カ国中で幸福度が最高 (8.5) のコスタリカをはじめ、開発途上で国内に様々な問題を抱えているにもかかわらず、幸福度の高い国も多い。

この原因としては、WDH のような主観的幸福度には各国の国民性の違いが関係している可能性がある (Diener et al. 1995, Frey and Stutzer 2002)。すなわち、米国社会では幸福が良い評価を受けるため、米国人は自分が幸福だと主張する人が多いといわれる。これに対し、フランス人は皮肉を言う人が多いため、反対の傾向があるとされる。一方、アジア人は他人との関係や社会的な調和を重視し、特に日本人は謙遜という社会慣習が強いため、非常に幸福ということを躊躇する傾向があるといわれる。これに対し、ラテンアメリカ人は国情から推測される以上に幸福だと回答する人が多いとされている。しかし、幸福感に対する国民性の違いについてはこのような定性的な記述は多く存在するが、数量的なデータは見当たらない。

そこで、幸福度における国民性の違いが表示できるような指標を探索した結果、幸福度とジニ係数の相関図が最適であることを見出した。150 カ国の幸福度とジニ係数の散布図を図 1 に示す。一

表 1. WDH 幸福度別の国数

国分類\幸福度	2.9 以下	3.0-3.9	4.0-4.9	5.0-5.9	6.0-6.9	7.0-7.9	8.0 以上	幸福度の平均	国数計
先進国				3	16	19	3	6.99	41
途上国	3	10	25	37	21	12	1	5.42	109
中南米		1			10	11	1	6.95	23
欧州・北米			4	13	9	14	3	6.45	43
アジア・オセアニア			7	15	17	6		5.91	45
アフリカ	3	9	14	12	1			4.49	39
国数計	3	10	25	40	37	31	4	5.86	150

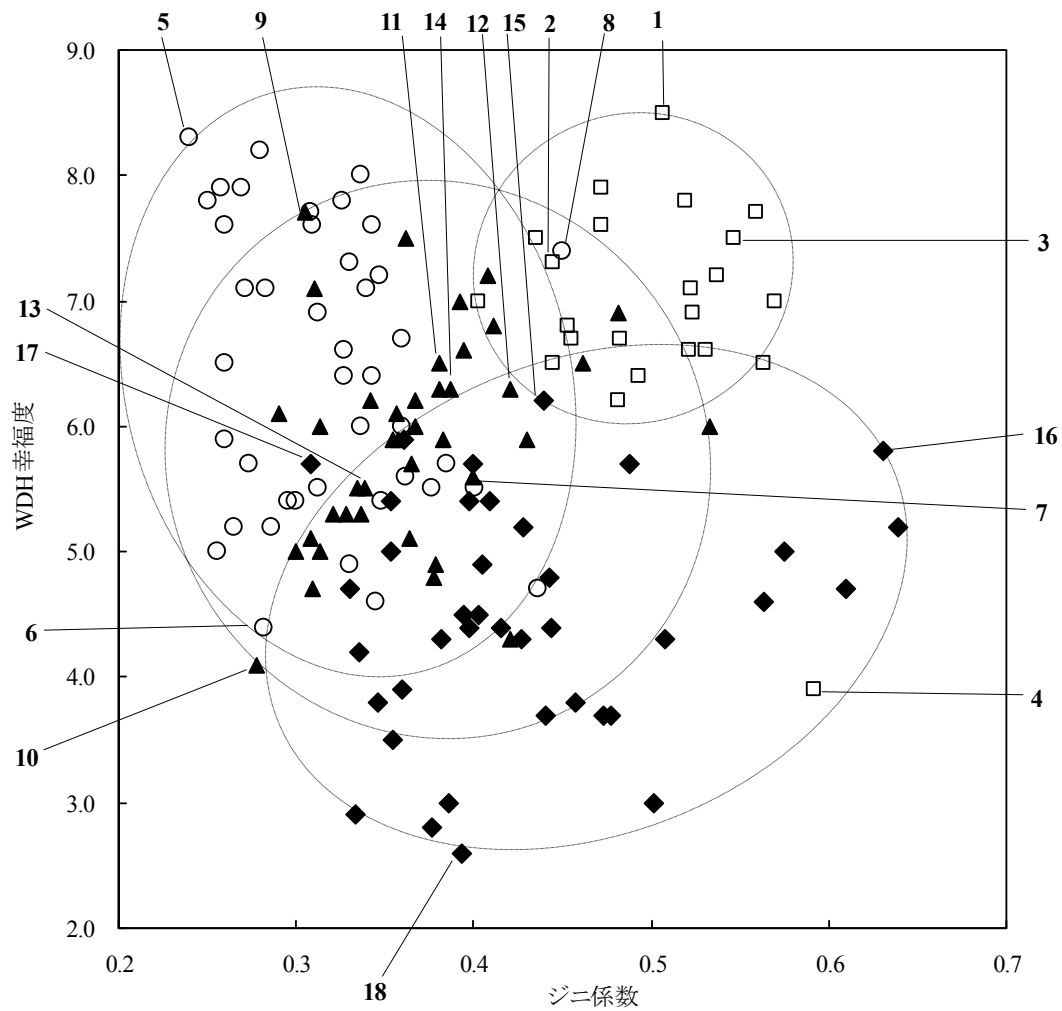


図 1. 世界 150 カ国のジニ係数 vs 幸福度の散布図

(地域記号□:中南米, ○:欧州・北米, ▲:アジア・オセアニア, ◆:アフリカ, 国番号1:コスタリカ, 2:アルゼンチン, 3:ブラジル, 4:ハイチ, 5:デンマーク, 6:ブルガリア, 7:ロシア, 8:米国, 9:オーストラリア, 10:アフガニスタン, 11:日本, 12:中国, 13:インド, 14:ブータン, 15:マラウイ, 16:南アフリカ, 17:エジプト, 18:トーゴ)

一般的には所得格差が大きい国ほど貧困層が多く、幸福度は低いと考えられるので、ジニ係数と幸福度との散布図は全体として右下がりの相関傾向を示すはずである。しかし、相関係数は-0.052ときわめて低く、幸福度とジニ係数は相関が認められない。

ところが、150 カ国を地域別に区分すると、それぞれまとまったクラスターを形成しており、これは主観的幸福観に内在する国民性の違いを反映していると考えられる。すなわち、欧州・北米の

43 カ国 (○印) は幸福度が高く、ジニ係数が低い国が多いため、図の左上の領域にまとまっている。中南米の 23 カ国 (□印) は欧州・北米より幸福度もジニ係数も高い国が多いため、右上の領域に集中している。アジア・オセアニアの 45 カ国 (▲印) は欧州・北米より幸福度が低く、ジニ係数が高い国が多いため、欧州・北米より右下の領域に分布している。アフリカの 39 カ国 (◆) は幸福度が低い国が多いため、下方に広く分散している。

したがって、ジニ係数から予想される全体的に右下がりの相関傾向に対して、コスタリカ、ブラジル等の中南米諸国の幸福度は高く、陽気で楽天的な国民性が表れていると推測される。また、米国も全般的傾向よりやや上にあり、前記の幸福顕示志向が表われていると思われる。逆に、アフリカ諸国の中にはジニ係数がかかなり低いにもかかわらず、幸福度が全体的傾向より低い国が多いが、これは所得格差以外の経済・政治的要因による生活水準の低さによるものと考えられる。

3 主要国の経済実態の分析

表1の4地域の代表的な18カ国について、幸福度および所得分布や各種の経済指標に基づいて経済実態の検証を試みる。所得分布はWorld Consumer Income and Expenditure Patterns 2014 (Euromonitor International 社刊行) のデータ集に収録されている世帯数10分位階級別の可処分所得データから計算した。本稿で分析した18カ国の所得分布を図2に示す。また、ジニ係数やGpC等の経済指標は2012年の数値を用いた。

(1) 中南米地域

世界150カ国の中で幸福度最高のコスタリカは所得分布が示すように低所得層の比率が高く、ジニ係数が0.507とかなり高い。また、他の中米諸国と同様、麻薬の横行により治安悪化、社会不安が進行している。しかし、政治、経済は安定しており、教育、医療等の文化水準は中南米諸国の中では高い。そのため、国民の幸福度が世界最高になっていると考えられる。しかし、図1の世界全体の予想相関傾向より高い幸福度はラテン民族の国民性を示していると解釈できる。

アルゼンチンは最近、債務不安が報じられているが、中所得層の比率が高く、ジニ係数(36位)も貧困率(46位)も高くない。しかし、長年の政情不安により経済が破綻し、経済成長率は1.9%(98位)と低い。そのため、S&Pはごく最近、国債を債務不履行ランクに格下げした。その一方で、芸術、科学、スポーツ等の文化水準は高い。また、国民は債務超過を気にせず、餓えることはない

気楽に考えている。このような国民性と相まって、国民の幸福度は7.3で、途上国の中では高い。

ブラジルは安価な労働力と豊富な天然資源により経済発展が期待され、ロシア、インド、中国、南アフリカと共にBRICSの一員である。しかし、経済成長率は0.9%(115位)と非常に低い。また、裕福な沿岸部と貧困な内陸部との経済格差が大きく、中所得層の比率が低く、ジニ係数は0.547(10位)と高い。殺人発生率も11位と高い。しかし、文化水準は比較的高く、国民の幸福度は7.5で、途上国の中では高い。

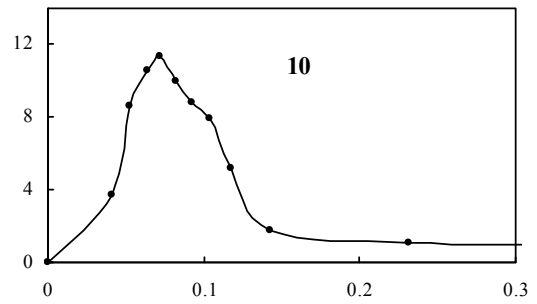
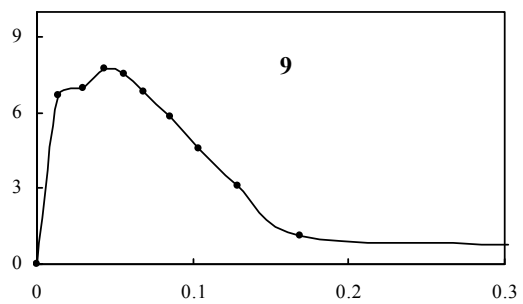
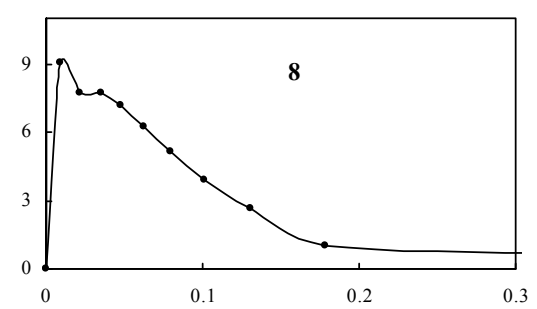
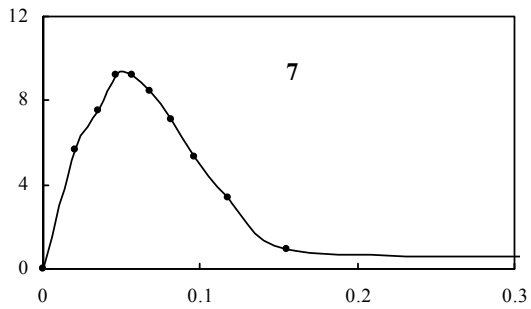
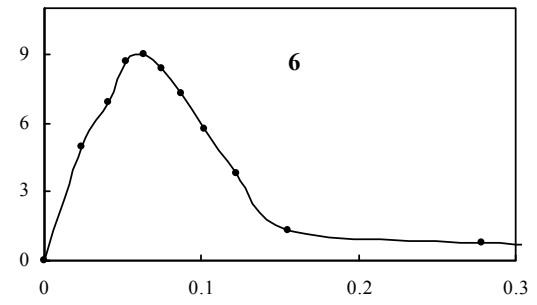
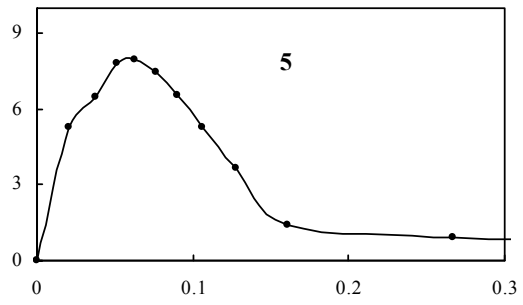
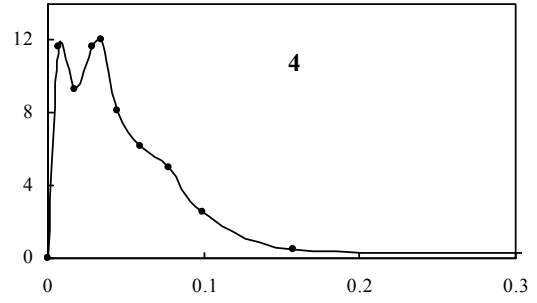
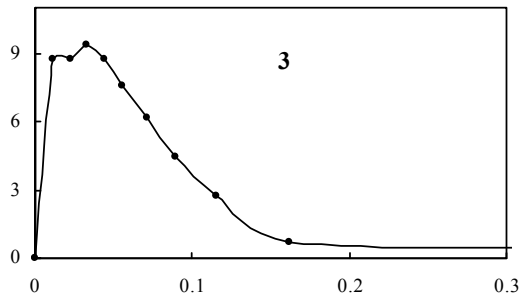
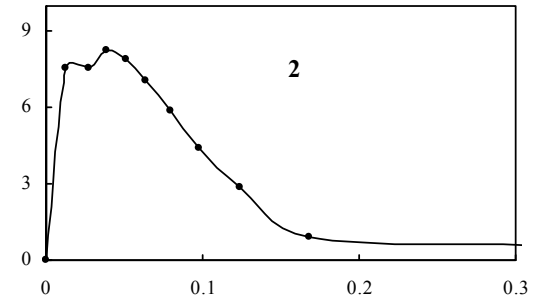
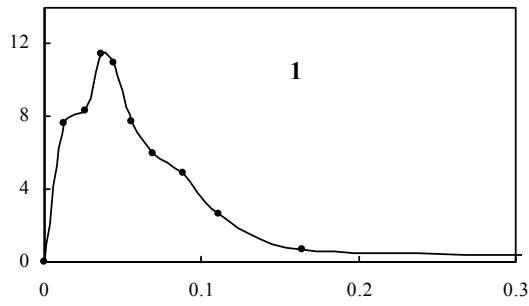
このように、中南米23カ国のほとんどは高い所得格差にもかかわらず、陽気、楽天的な国民性を反映して幸福度が高いが、ハイチのみ3.9と幸福度が非常に低い。同国は1804年の独立以来の政治的混乱、大災害、零細農業等によりGpCは123位と低い。極貧層の比率がきわめて高く、ジニ係数は0.592で4位、貧困率は0.80で世界最高で、西半球の最貧国といわれている。また、殺人率も36位と高く、中南米の中では突出して低い幸福度のこの国にはラテン民族の国民性があてはまらない。

(2) 欧州・北米地域

この地域では幸福度が高くジニ係数が低い先進国が多いが、中でも図1の左上隅に位置するデンマークが目につく。GpCは7位と高く、中所得層の比率がきわめて高く、ジニ係数0.24は世界最小値である。教育、医療、福祉水準も最高税率(51.7%, 9位)も高い高福祉高負担国家であるが、国民の支持が高く、幸福度は8.3ときわめて高い。

対照的にこの地域の中で東欧のブルガリアは幸福度が4.4と最低である。政情不安により経済発展が遅れており、EU加盟国の中で最貧国とされている。経済成長率は0.8%(116位)とかなり低く、GpCは64位と低く、失業率は12.3%(29位)と高い。中所得層の比率が高く、ジニ係数は0.282、貧困率は0.123で、所得格差は低い、生活水準が低く、国民の幸福度が非常に低い。

ロシアはBRICSの一員であり、豊富な資源を背景に経済発展が期待されている。しかし、経済成長率は3.4%(80位)とかなり低く、GpCも42



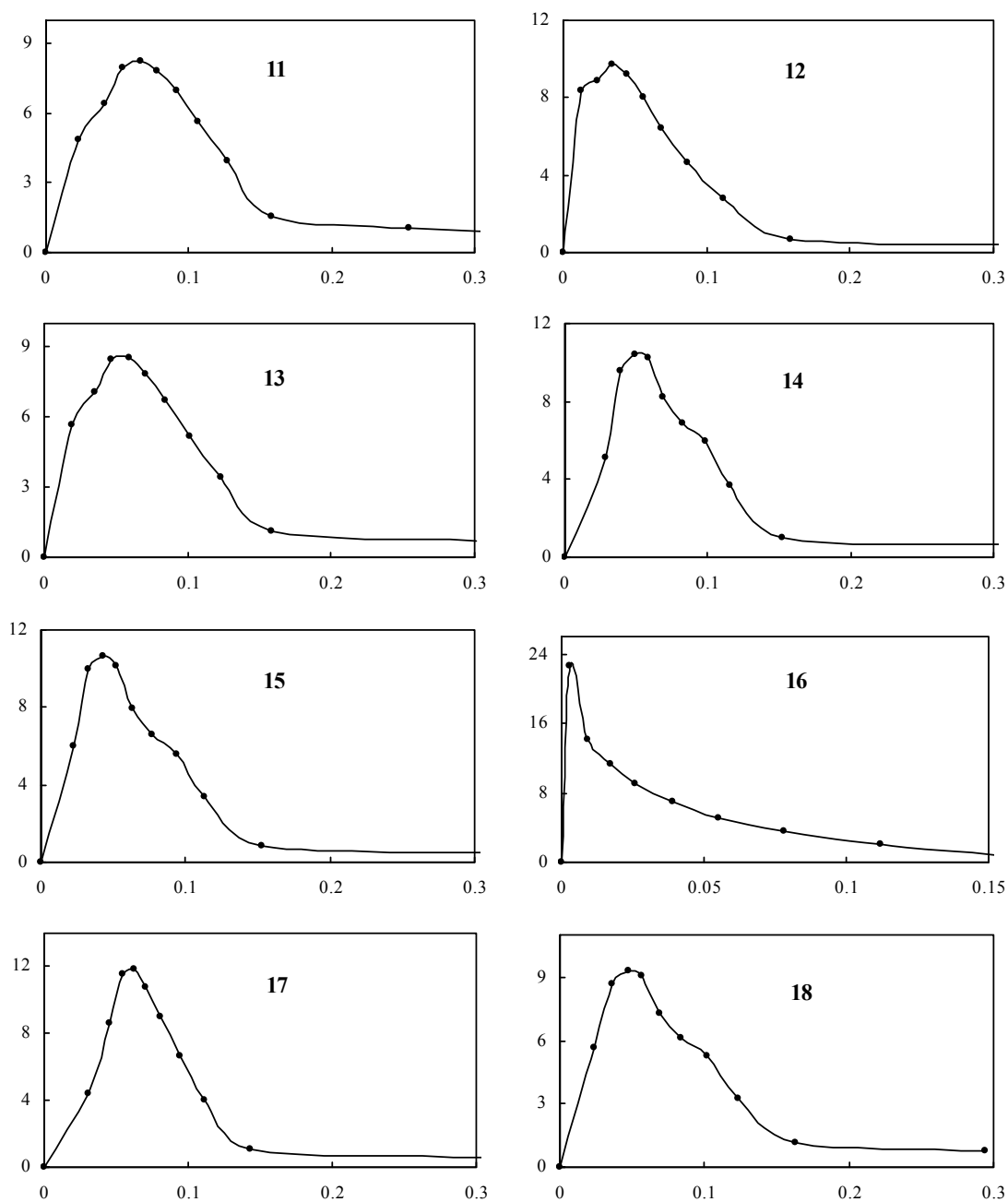


図 2.18 カ国の所得分布

(横軸: 相対所得, 縦軸: 分布密度, 国番号 1: コスタリカ, 2: アルゼンチン, 3: ブラジル, 4: ハイチ, 5: デンマーク, 6: ブルガリア, 7: ロシア, 8: 米国, 9: オーストラリア, 10: アフガニスタン, 11: 日本, 12: 中国, 13: インド, 14: ブータン, 15: マラウイ, 16: 南アフリカ, 17: エジプト, 18: トーゴ)

位と低い。また、市場経済化の進行により格差が拡大し、低所得層の比率が高く、ジニ係数は0.401と高い。軍事費の対GDP比率も8位と高く、自殺率（2位）も殺人率（42位）もかなり高い。そのためか幸福度は5.5と低い。

自由主義経済の盟主である米国は、GDPは世界1位であるが、GpCは10位である。図2の所得分布のように低所得層の比率がきわめて高く、高所得層に長い裾を引いているが、巷間言われているような富裕層と極貧層の二極化は認められない。ジニ係数は0.45と高く、最高税率も55.9%（4位）と高い。また、失業率も8.1%と高く、軍事費率も9位とかなり高い。それにもかかわらず、幸福度が7.4と高いのは、前記のような幸福追求志向のためと考えられる。

(3) アジア・オセアニア地域

この地域の各国は欧州・北米諸国よりジニ係数がやや高く、幸福度がやや低い領域に分布しているが、その中でオーストラリアは幸福度が地域内で最高（7.7）である。各種産業が盛んで、GpCは5位と高く、失業率は5.2%（104位）と低い。中所得層の比率がかなり高く、ジニ係数も（0.305, 124位）も貧困率（0.144, 103位）も低い。最高税率は45%と高いが、同国は英連邦に属しており、欧州・北米圏に近い。そのため、幸福度はアジア・オセアニア圏の中では際立って高い。

一方、アフガニスタンはこの地域の中で幸福度が最低（4.1）である。中所得層の比率が高く、ジニ係数は0.278で、アジアでは最小である。また、経済成長率14.4%も世界2位の高さである。このような経済指標にもかかわらず、長年の戦乱により生活資源が不足し、経済は国際援助に頼っている。失業率は50位、軍事費率は17位とかなり高く、平均寿命は61歳と短い。そのため、幸福度がきわめて低い。

日本の幸福度は6.5と低い、中所得層の比率が高く、ジニ係数（0.381, 70位）も貧困率（0.16, 93位）も低い。GDPは中国に抜かれて3位に落ちたが、GpCは13位で中国より7倍以上大きい。経済成長率は2%（96位）とかなり低い、失業率（112位）も軍事費（111位）も低い。自殺率

は9位と高いが、平均寿命83歳は世界最高である。このように、良好な経済状態にもかかわらず、先進41カ国中で28位と低い幸福度は前記の日本人の謙虚さを示すものであろう。

BRICSの一員である中国は、世界経済への影響の大きさから経済成長が注目されているが、成長率7.8%は18位で、それほど高くない。また、GDPは米国に次ぐ2位であるが、人口の多さによりGpCは69位と低い。沿岸部の富裕層と内陸部の貧困層との所得格差が増大しており、低所得層の比率がきわめて高く、ジニ係数は0.421とかなり高い。また、最高税率も45%と高く、自殺率も38位と高い。所得格差や政治体制への不満のため、経済発展が期待されている国としては幸福度が6.3と低い。

インドもBRICSの一員であるが、経済成長率は4.7%（57位）と低い。中所得層の比率が高く、ジニ係数は0.339と低く、貧困率（0.219）も失業率（3.4%）もきわめて低い。しかし、依然として農業への依存度が高く、GpCは109位と非常に低い。さらに、インフラ、環境問題、医療体制等の課題が山積し、平均寿命は66歳とかなり短命であり、国民の幸福度が5.5と低い。

ブータンはGNHを推進しているにもかかわらず、幸福度は6.3と高くない。中所得層の比率が高く、ジニ係数（0.387）も貧困率（0.12, 114位）も低い。また、経済成長率は9.4%（10位）と高く、失業率も2.1%（137位）できわめて低い。しかし、インドと同様、農業への依存度が高く、経済発展が遅れており、GpCは101位と低い。そのため、GNHが未だ目標段階といわれているように、国民の幸福度は低い。

(4) アフリカ地域

この地域で幸福度最高はマラウイの6.2である。農業依存国であるが、旱魃により食料危機に陥り、国連が援助している。そのため、GpCは142位、経済成長率は100位、ジニ係数は40位、貧困率は18位、自殺率は11位であり、経済事情は劣悪である。また、エイズの蔓延により平均寿命は55歳（135位）と短い。それにもかかわらず、高い幸福度は楽天的な国民性があるのだろうか。

南アフリカ共和国はBRICSの一員であるが、経済成長率は92位ときわめて低い。極貧層の比率が非常に高く、ジニ係数0.631は2位と非常に高い。治安がきわめて悪く、失業率（25%、5位）や殺人率（7位）も高い。また、エイズの蔓延により、平均寿命は56歳と非常に短い。そのため、国民の幸福度は5.8と低い。

エジプトは中所得層の比率が高く、ジニ係数は0.308で、アフリカでは最小である。また、失業率も11.9%と低い。BRICSの次に経済発展が期待されるNEXT11の一員であるが、農業と観光業以外の産業が弱体であり、GpCは94位と低く、経済成長率も2.2%と低い。さらにアラブの春以降も政情不安が続いており、そのため、国民の幸福度が5.7とかなり低い。

トーゴは幸福度が2.6で、150カ国の最下位である。低所得層の比率が高く、ジニ係数（0.393）も貧困率（0.587、11位）も高く、世界最貧国の1つとされている。農業への依存度が高く、資源も乏しく、GpCは133位ときわめて低い。そのため、失業率、軍事費率、殺人率は高く、平均年齢は56歳と短い。このような劣悪な経済状態にある国民の幸福度が最も低いのは当然である。

4 結 論

以上のように世界の各地域の主要国について、幸福度および所得分布やジニ係数等の経済指標に基づいて経済実態を分析した結果、幸福度は概ね経済指標と関連しているが、中南米等の一部の国々では国民性の違いによる主観的評価の影響が大きいことが判明した。本稿で用いたWDHのような主観的幸福度にはこの国民性の内在や幾つかの問題点があることが指摘されている（白石・白石 2007、岡部 2012）。一方、HDIのような客観的幸福度には果たして国民の主観的幸福感が反映されるかという問題がある。

幸福度の概念は前記のように経済指標の代替になる国家の開発目標の1つとして提案されたが、最近では幸福の概念を非市場的な環境資産まで拡大した包括的資産指数（Inclusive Wealth Index）という新たな幸福度指標も提案されている

（UNEP）。筆者らはこの種の国家目標について世界の多数国のデータを用いてその有効性を検証したいと考えている。

参考文献

- 枝廣淳子・草郷孝好・平山修一『GNH（国民総幸福） みんなでつくる幸せ社会へ』海象社（2011）。
- 岡部光明『幸福度等の国別世界順位について：各種指標の特徴と問題点』SFC ディスカッションペーパー SFC-DP 2012-004（2012）。
- 幸福度に関する研究会『幸福度に関する研究会報告－幸福度指標試案－』, http://www5.cao.go.jp/keizai/koufukudo/pdf/koufukudosian_sono1.pdf, 同 sono2.pdf, 同 sankousiryoku.pdf.
- 白石賢・白石小百合「幸福度研究の現状と課題－少子化との関連において」『経済分析』（179）pp.96-131（2007）。
- 鈴木孝弘・田辺和俊「ジニ係数および所得分布に基づく世界各国の所得格差の検証」『現代社会研究』（10）pp.3-10（2013）。
- 田辺和俊・鈴木孝弘「サポートベクターマシンを用いた世界各国の幸福度の決定要因の実証分析」『経済分析』（188）pp.44-67（2014）。
- 北京大学中国社会科学センター『中国民生発展報告 2014』（2014）。
- Acemoglu, D., Robinson, J. A., "Why Nations Fail: The Origin of Power, Prosperity, and Poverty," Profile Books（2012）: 鬼澤忍（訳）『国家はなぜ衰退するのか、権力、繁栄、貧困の起源（上・下）』早川書房（2013）。
- Allen, R. C. "Global Economic History: A Very Short Introduction," Oxford University Press（2011）: グローバル経済史研究会（訳）『なぜ豊かな国と貧しい国が生まれたのか』NTT（2012）。
- Bok, B. "The Politics of Happiness: What Government Can Learn from the New Research on Well-Being," Princeton University Press（2011）: 土屋直樹・茶野努・宮川修子（訳）『幸福の研究－ハーバード元学長が教える幸福な社会』東洋経済新報社（2011）。
- Crow, B., and Lodha, S. K. "The Atlas of Global Inequalities," Myriad Editions（2011）: 岸上伸啓（訳）『格差の世界地図』丸善出版（2012）。
- Diamond, J. "Guns, Germs, and Steel: The Fates of Human Societies," Norton（1997）: 倉骨彰（訳）『銃・病原菌・鉄 1万3000年にわたる人類史の謎』草思社（2000）。
- Diener, E., Suh, E. M., Smith, H., and Shao, L. "National Differences in Reported Subjective Well-being: Why Do They Occur?" Social Indicators Research, Vol. 34, No. 1, pp.7-32（1995）。
- Frey, B., and Stutzer, A. "Happiness and Economics," Princeton Paperbacks（2002）: 佐和隆光（監訳）・沢崎冬日（訳）『幸

- 福の政治経済学 人々の幸せを促進するものは何か』
ダイヤモンド社 (2005).
- Graham, C. "The Pursuit of Happiness: An Economy of Well-Being," Brookings Institution Press (2011): 多田洋介 (訳)
『幸福の経済学 — 人々を豊かにするものは何か』 日本
経済新聞出版社 (2013).
- Lakner, C. and Milanovic, B. "Global Income Distribution From
the Fall of the Berlin Wall to the Great Recession," World
Bank Policy Research Working Paper (6719) pp.1-60
(2013).
- Sachs, J. D. "The End of Poverty: How We Can Make It Happen
in Our Lifetime," Penguin (2005): 鈴木主税・野中邦子
(訳). 『貧困の終焉 2025 年までに世界を変える』 早
川書房 (2006).
- Stiglitz, J. E., Sen, A., and Fitoussi, J.-P. "Mismeasuring Our
Lives: Why GDP Doesn't Add Up," The New Press (2010):
福島清彦 (訳) 『暮らしの質を測る — 経済成長率を超
える幸福度指標の提案』 金融財政事情研究会 (2012).
- United Nations Development Programme (UNDP). "United Nations
Human Development Reports, Composite Indices-HDI and
beyond," <http://hdr.undp.org/en/statistics/understanding/indices>.
- United Nations Environment Programme (UNEP). "Inclusive
Wealth Report 2012. Measuring Progress Toward
Sustainability," http://www.unep.org/pdf/IWR_2012.pdf.
- World Database of Happiness, <http://www1.eur.nl/fsw/happiness/>.
- World Economic Forum, "Global Risks 2014. Ninth Edition,"
http://www3.weforum.org/docs/WEF_GlobalRisks_Report_2014.pdf.